

# フィッツジェラルドとヘミングウェイ

## 内田 勉

スコット・フィッツジェラルドの伝記的研究の一環に彼とアーネスト・ヘミングウェイとの交友関係を扱う分野がある。多くの友人・知己に恵まれたフィッツジェラルドの交友関係において最も大きな存在感を持った作家はほかならぬヘミングウェイであり、ヘミングウェイとの交友は、最初の伝記 *Far Side of Paradise* (1951) 以来、フィッツジェラルドの作家人生において欠くことのできない要素として、彼を扱う伝記・評伝には必ず詳述されてきた。とは言え、共に逸話やゴシップの類いのエピソードに事欠かない二人の特異な作家の交友に関することだけに、信憑性に欠けるようなエピソードも少なくなく、ヘミングウェイ自身が書き遺した20年代バリ時代の回想録を作家の死後に編集出版した *A Moveable Feast* (1964) におけるフィッツジェラルドとの交友の記述にしても、事実とは矛盾する内容が含まれていることは、今日、研究者の間では常識になっている。

フィッツジェラルドとヘミングウェイとの交友関係の問題を本格的に扱った研究は、1978年に刊行された Matthew J. Bruccoli の *Scott and Ernest: The Authority of Failure and the Authority of Success* が最初であろう。但し、この時は、ヘミングウェイ書簡集が初めて刊行される数年前のことであり、また、ヘミングウェイの書簡そのものからの引用が法的に許されていなかったため、この研究書は、ヘミングウェイ書簡の要約のみを載せるという限界を持ち、また、脚注がないという不備もあった。

ヘミングウェイ書簡集が刊行され、また、ヘミングウェイ書簡からの直接引用が可能になるという新しい研究環境の下で、上記の不備を補い、また、フィッツジェラルドとヘミングウェイに関する新たな資料を使って、*Scott and Ernest*を書き改めたものが、同じ著者による *Fitzgerald and Hemingway: A Dangerous Friendship* である。この書は、フィッツジェラルドとヘミングウェイとの交友関係を研究する上で基本となるものであり、また、同書が刊行された1994年以降、この問題に関する研究資料は、質的にも量的にも急速に増大する。まず、同年の内に、同じ Brucoli により新たに編集されたフィッツジェラルド書簡集 *F. Scott Fitzgerald: A Life in Letters* が刊行され、1996年には同じ編者により *The Only Thing That Counts: The Ernest Hemingway/Maxwell Perkins Correspondence 1925-1947* が刊行された。特に後者は三つの理由で価値が高い。フィッツジェラルドとヘミングウェイの共通の編集者であり友人でもあったマクスウェル・パーキンズは、フィッツジェラルドに直に言うことが憚られるような事柄については、ヘミングウェイ宛て書簡の中でそれに言及し、ヘミングウェイを通してフィッツジェラルドに伝わるような工夫をしていた。初めて刊行されたヘミングウェイとパーキンズの往復書簡集により、そのあたりの消息を今我々は、具体的に知ることができる。また、フィッツジェラルドとヘミングウェイは、相手の作品や人格そのものへの評価をストレートに相手に告げるかわりに、パーキンズに伝えることがあった。しかも、そういう場合、パーキンズに伝える内容の方に本音が表れていることもあった。この書簡集により、ヘミングウェイのフィッツジェラルドに対する思いや評価を今までとは別の角度から窺い知ることができるようになったのは、この書簡集の持つもう一つの価値である。三番目の価値としては、フィッツジェラルドとヘミングウェイが決定的に仲違いをして、互いに殆ど音信不通となった1937年以降、パーキンズが二人の作家の消息をそれぞれに伝え、また、何とか二人の関係を取り戻そうと努めるのだが、そのあたりの具体的な有り様がこの書簡集により、よく分かるようになったことである。この

ような重要な意味において、ヘミングウェイ・パーキンス書簡集は、1971年のフィッツジェラルド・パーキンス書簡集*Dear Scott/Dear Max: The Fitzgerald—Perkins Correspondence*を補完するものである。

更に、上記の資料や研究書を踏まえて、フィッツジェラルドとヘミングウェイとの交友関係の問題をこれまでのところ最も包括的に扱ったScott Donaldsonの研究書*Hemingway vs. Fitzgerald: The Rise and Fall of a Literary Friendship*が1999年に刊行された。また、ヘミングウェイ生誕百年に当たるこの年には、Michael Reynoldsの*Hemingway: The Final Years*が上梓され、レノルズ畢生の大作『ヘミングウェイ伝』5巻本が完結した。そして、2001年には、上記Brucoliの*Fitzgerald and Hemingway: A Dangerous Friendship*の邦訳『新・フィッツジェラルドとヘミングウェイ 友情の綱渡り』が刊行され、2002年には、フィッツジェラルドとゼルダとの書簡集*Dear Scott, Dearest Zelda: The Love Letters of F. Scott and Zelda Fitzgerald*が初めて編集・出版され、また、Brucoliの*Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald* (Second revised edition)も上梓された。フィッツジェラルドとヘミングウェイとの交友関係を考察する上で、今ほど資料的に恵まれた時はかつてない。これまで、主としてフィッツジェラルドの研究に携わってきた私が、ヘミングウェイ研究の分野にも敢えて踏み込む形でこのテーマを扱うことを考えたのは上記の理由による。

個性の強い二人の作家は、知り合った当初こそは友好的であったが、やがて関係は悪化し破綻に至る。20世紀アメリカ文学を代表するフィッツジェラルドとヘミングウェイは互いに友人であると同時に、始めから不可避的にライバルであり、二人の間に生ずる摩擦や葛藤は、不慮の出来事を契機にしているような場合でも、本質的にはそれぞれの文学の評価や意見の相違に根ざしていた。二人がパリで初めて出会う1925年4月の時点で、3歳年長のフィッツジェラルドは、私家版に近いような薄い2冊の作品しかないヘミングウェイに比べ(しかもアメリカで出版された作品はゼロ)、刊行されたばかりの*The Great Gatsby*を含め3冊の

novelと2冊の短編集を既に出していたが故に、後進のヘミングウェイに対し先輩作家として振る舞った。表面上は確かに、実績豊かな有名作家と無名の作家志望青年という大きな格差が歴然としていたが、この時既に、ヘミングウェイは独自の文体と創作方法をほぼ確立していることに自信を持っており、他方で、フィッツジェラルドは *Gatsby* 以降の停滞とそれに伴う自信喪失が始まりかける所であり、この二人の作家は初めて出会った時、やがては、運命の逆転とでも言うべき対照的な消長をそれぞれが辿るその始めの時点に立っていたのである。

ヘミングウェイと知り合う前に、作品を通してヘミングウェイの非凡な才能を洞察したフィッツジェラルドは、いち早くパーキンズに、'This is to tell you about a young man named Ernest Hemingway, who lives in Paris...writes...has a brilliant future. ...He's the real thing' という手紙を書いて注意を促したが、<sup>1</sup> ヘミングウェイと知り合ってから以後は、新しい才能が早く世に認められるようにするための努力を惜しまなかった。その手始めとして、フィッツジェラルドはまず、ヘミングウェイの短編“Fifty Grand”（執筆1924年、the *Atlantic Monthly* 1927年7月掲載）を *Scribner's Magazine* に掲載してもらうため、パーキンズに原稿を送った。<sup>2</sup> しかし、フィッツジェラルドはその前に、ヘミングウェイに“Fifty Grand”の冒頭部の対話をあまりに知られすぎた話だという理由で削除させている。このことは、ヘミングウェイがフィッツジェラルドに対して根深い怒りと不満を抱く最初のきっかけとなった。<sup>3</sup> ヘミングウェイは、この時から35年も経った1959年に執筆した *The Art of the Short Story* の中で、愚かにもフィッツジェラルドの忠告に従って“Fifty Grand”

---

1 Fitzgerald's letter to Perkins, c. 10 October 1924. *Dear Scott/Dear Max*, p. 78.

2 Fitzgerald's letter to Perkins, 1 December 1925. *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*, p. 182. この手紙の末尾で、フィッツジェラルドはパーキンズに、*Scribner's Magazine* の編集長 Robert Bridges はヘミングウェイの新しい短編に興味を持つだろうかと問い合わせ、パーキンズは1926年2月3日付けの返信で、'That story of Hemingway ("Fifty Grand") is most excellent' と述べ、作品受領を認めている。 *Dear Scott/Dear Max*, p. 132.

3 Matthew J. Bruccoli, *Fitzgerald and Hemingway: A Dangerous Friendship*, p. 53 を参照せよ。

の重要な冒頭部を削除してしまったと、憤懣やるかたなき気持ちを述べている。<sup>4</sup> しかし、Scott Donaldsonによれば、実は、ヘミングウェイは、フィッツジェラルドの忠告に従ったばかりではなく、その忠告をより徹底するかのように、冒頭部における対話以外の箇所も削除しており、そのことについては遂に自ら公に語ることはしなかったのである。<sup>5</sup>

ヘミングウェイの文学をフィッツジェラルドが初めて公に批評したのは、アメリカで出版されたものとしてはヘミングウェイの最初の作品となる *In Our Time* を好意的に論じた“*How to Waste Material: A Note on My Generation*” (*The Bookman*, 63, May 1926)であるが、<sup>6</sup> その中でフィッツジェラルドが、“*My Old Man*”におけるAndersonの影響に言及し、この短編を *In Our Time* の中で最も成功しなかった作品と評したことが注目される。フィッツジェラルドは更に、ヘミングウェイへの手紙の中で、*In Our Time* における各短編のランク付けを行なったらしい。この手紙自体は現存しないが、この手紙に対する返信の中で、ヘミングウェイは、フィッツジェラルドによるランク付けを興味深いつながりながらも、“*My Old Man*”が評価されなかったことへの不満を漏らし、この短編はよい作品だと反論している。<sup>7</sup>

1926年10月22日に上梓された *The Sun Also Rises* (『日はまた昇る』) の場合にも、“*Fifty Grand*”の場合と同様のことが起きた。*A Moveable Feast* (『移動祝祭日』) の中で、「1925年の秋、『日はまた昇る』の最初の原稿を私が見せようとしなかったのでスコットは驚いてしまった。…1926年4月末に完成原稿を私がスクリブナー社に郵送した後に初めて彼は原稿を見ることができた。スコットが私の書いている原稿のことでいくら

4 *The Art of the Short Story*. in *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*, p. 5.

5 *Hemingway vs. Fitzgerald: The Rise and Fall of A Literary Friendship*, p. 79.

6 *F. Scott Fitzgerald in His Own Time*, pp. 148-149.

7 Hemingway's letter to Fitzgerald, c. 24 December 1925. *Ernest Hemingway: Selected Letters*, pp. 180-183.

気を揉み、私の手助けをしようといくら願っても後の祭りだというような冗談を彼に言った覚えがある」と書かれているように、<sup>8</sup> ヘミングウェイは、『日はまた昇る』が出版される半年前にフィッツジェラルドに原稿を見せたことを認めてはいるものの、そのことはこの作品の完成に何の影響も与えていないということを強調している。しかし、フィッツジェラルドが『日はまた昇る』の原稿を読んだ後でヘミングウェイに渡した10ページに及ぶ意見書の中で、特に原稿始めの複数章における削除を指示したことで、<sup>9</sup> その意見書を読んだヘミングウェイが、パーキンスに宛てた手紙の中で、'(Scott) suggested various things in it to cut out—in those first chapters—which I have never liked—but I think it is better to just lop that off' と述べ、<sup>10</sup> また、フィッツジェラルド宛ての手紙では、'I cut The Sun to start with Cohn—cut all that first part'<sup>11</sup> と言っていることを合わせて考えれば、『移動祝祭日』における主張とは全く異なり、ヘミングウェイがフィッツジェラルドのアドバイスに従って、校正の段階で、『日はまた昇る』の原稿の冒頭部を大幅に削除したことは明らかである。しかも、特に明記しておかねばならないのは、既に Donaldson が指摘したことであるが、<sup>12</sup> ヘミングウェイはフィッツジェラルドの意見に唯々諾々と従うのではなく、フィッツジェラルドの意見に沿う時は、それをより徹底した形で原稿を修正し、そして、後になると、フィッツジェラルドの意見を受け入れた事実を否定するようになることである。“Fifty Grand”の場合にも見られたヘミングウェイのこの屈折した行動様式を、我々はこの後、*A Farewell to Arms* の場合においてまた目撃することになるが、フィッツジェラルドがヘミングウェイの作品に押し付けがましい(とヘミングウェイには思われた)注文を繰り返したことが、

8 Pp. 184-185. この箇所を含め、本文中における引用文の日本語訳は全て引用者による。

9 Brucoli, *Fitzgerald and Hemingway*, pp. 64-67.

10 Hemingway's letter to Perkins, 5 June 1926. *Selected Letters*, pp. 208-209. *The Only Thing That Counts*, pp. 40-41.

11 Hemingway's letter to Fitzgerald, c. 7 September 1926. *Selected Letters*, pp. 216-217.

12 *Hemingway vs. Fitzgerald*, p. 96.

この二人の作家の交友関係に軋轢を生じさせた最も本質的な要因であると考えられる。後述するように、フィッツジェラルドは彼にとって最後の年になる1940年に、ヘミングウェイと何年何月にどの位の頻度で会ったかという記録を書いているが、その記録の最後に、「26年以来本当の友人ではない（‘Not really friends since ‘26’）」と記しているのも、<sup>13</sup> 結局は、上記のことに起因している筈である。

ところで、現在我々が利用できる最新の資料全てを動員すれば、確定がむずかしいと思われてきた伝記的事実にどの位迫ることができるか、その一例として、ヘミングウェイの“Ellerslie”訪問を検討してみたい。1927年3月、ハリウッドにおける仕事から戻ったフィッツジェラルドは、デラウェア州ウィルミントンに住居を求めた。かつてプリンストンの学生寮における彼の最後のルームメイトであり、大学のユーモア誌 *The Princeton Tiger* の編集を共にした John Biggs, Jr. がウィルミントンで弁護士をしており、フィッツジェラルド夫妻のために見つけてくれた格安の物件が豪邸“Ellerslie”である。賃貸契約期間は1927年3月から29年3月までの2ヶ年で、フィッツジェラルド夫妻は、28年夏におけるパリ滞在を除けばおおむねここに居住した。フィッツジェラルドの生涯で“Ellerslie”時代といわれる時期である。1928年11月17日、ヘミングウェイ夫妻は、プリンストンで行なわれたエール対プリンストンのフットボール試合をフィッツジェラルド夫妻と共に観戦した後、“Ellerslie”を訪れる。<sup>14</sup> この伝記的事実については、訪問後にヘミングウェイとフィッツジェラルドが交わした書簡の他に、ヘミングウェイが書き残した未発表の草稿、更に、彼らの友人・関係者が著した2冊の書物を加えて、計5つの資料がある。

13 Brucoli, *Fitzgerald and Hemingway*, p. 206.

14 この試合の観戦日を *Some Sort of Epic Grandeur* (Second revised edition, p. 267) はなぜか、旧版と同様11月19日としている。著者Brucoli教授に私が問い合わせた所、同教授からの2003年1月7日付けの返信に、「今、カレンダーをチェックしたが、11月17日が正しい。ミスタイプによる誤記である」という説明があった。

まず、ヘミングウェイの友人 A. E. Hotchner が 1966 年に出した *Papa Hemingway* の伝える事柄についてである。Hotchner は雑誌 *Cosmopolitan* の記者をしていた 1948 年の 9 月、<sup>15</sup> ハバナに居住していたヘミングウェイに取材で初めて会い、それ以降 13 年間、作家の死に至るまでヘミングウェイと交友を続けた人物であり、*Papa Hemingway* はその交友の回顧録である。Hotchner が、ヘミングウェイからフィッツジェラルドを訪問した時の話を聞くのは、1954 年、二人で一緒に南仏アルルからニームに向かってドライブ旅行をしていた時である。しかし、Hotchner の伝える内容は、訪問した当人ヘミングウェイから直接聞いたにしては、あまりに基本的事実からかけ離れているのである。Hotchner によれば、ヘミングウェイがフィッツジェラルド夫妻を訪れるのは、ウィルミントン郊外ではなく、ボルティモア郊外である (p. 106)。確かに、フィッツジェラルドはボルティモア郊外にも居住したことがある。しかしそれは、精神の病の再発したゼルダが、ジョンズ・ホプキンス病院附属施設に入院した後の 1932 年 5 月から翌 33 年 11 月までの“La Paix”時代のことである。しかも、ヘミングウェイが“La Paix”を訪問したという事実は無い。更に、Hotchner によれば、ヘミングウェイを駅まで出迎えたフィッツジェラルドのお抱え運転手の名前は Pierre で、車は Hotchkiss であった (p. 106)。Pierre はヘミングウェイに対し、フィッツジェラルドがオイル交換をさせてくれないと嘆く。そして、ディナーの席で、ホスト役のフィッツジェラルドがヘミングウェイの前で、黒人メイドに対し、言葉によるセクハラを執拗に繰り返す様子が描かれている (p. 107)。フィッツジェラルドがパリから連れ帰ったお抱え運転手の名前は Philippe が正しく、また、この時フィッツジェラルドが所有していた車は Buick であった。とは言え、26 年も前の思い出をヘミングウェイは語っているのである。出迎える車の種類や運転手の名前を間違えた所で、必ずしも不

---

15 A. E. Hotchner, *Papa Hemingway: A Personal Memory*, p.15 によると 1948 年の春になる。以下、同書からの引用は本文中にページ数のみ記す。

自然ではない。しかし、ヘミングウェイが、生涯でたった一度だけ、アメリカのフィッツジェラルド夫妻の自宅を訪問し、そのことについて語る時に、実際に訪れたウィルミントンを訪れてもいないボルティモアと取り違えるなんてことがあるだろうか。しかも、Hotchnerの伝える話は、他にもおよそあり得ないような事柄が多いのである。フランスからアメリカに帰るフィッツジェラルド夫妻をパリからルアーブルまで送ったタクシー運転手のPierreは、お抱え運転手としてアメリカまでついて来いといきなりフィッツジェラルドに言われ、当然の如く、パスポートも着替えもないと言って断ろうとするが、結局、臨時のパスポートが即座に発行され、Pierreは自分のタクシーをその場に乗り捨てて乗船してしまうことになる。これでは、与太話と受け取られても仕方が無いのではないか。この話の中に、ヘミングウェイの特徴というのがあるとするれば、酩酊した時のフィッツジェラルドの醜態を強調している部分だけであろう。

ヘミングウェイの“Ellerslie”訪問に関する資料として、当事者から直接話を聞くことのできた人物によるもう一つの書が、*Exiles from Paradise* (1971)である。著者Sara Mayfieldはゼルダのモンゴメリー時代からの友人で、ヘミングウェイの“Ellerslie”訪問の場には居合わせていなかったが、このときの様子をゼルダから直接聞くことができた。*Exiles from Paradise*においては、“Ellerslie”を訪れたヘミングウェイがフィッツジェラルドと「男色や肛門性愛、その他様々な変態行為について」卑猥なジョークを交わし、ゼルダを困惑させたことが強調される。<sup>16</sup> また、ヘミングウェイとフィッツジェラルドが飲み騒いで、喧嘩沙汰になり、警察に留置されたことが記され、更に、ヘミングウェイが辞去する前にフィッツジェラルドから100ドル借りたことを知ったゼルダが憤慨したとなっている(p. 133)。最後の借金の件については、“Ellerslie”

16 Sara Mayfield, *Exiles from Paradise*, p. 133. 以下、同書からの引用は本文中にページ数のみ記す。

訪問から約3週間後の12月6日、ニューヨークからフロリダに向かっていたヘミングウェイが、車内で父親の訃報を受け、急遽葬儀に参列するために、フィッツジェラルドから100ドルを借りたことと混同していると考えられるが、警察沙汰に関しては、“Ellerslie”訪問後にヘミングウェイが出した札状に、フィッツジェラルドが警官に逮捕されたことが記されている。<sup>17</sup>

Hotchnerによる資料といい、Mayfieldによる資料といい、いずれも当事者から聞き書きしたものが元になっている筈だが、伝記的資料としてあまり当てにならないことは明白である。Hotchnerの場合には、記述全体が信憑性に欠ける上、酔ったフィッツジェラルドは極度に醜悪になるというヘミングウェイ特有の見解に影響されている可能性がある。また、*Exiles from Paradise*の場合には、ゼルダのヘミングウェイ嫌いを反映して、彼の醜行をことさら強調する傾向が強い。同じ事象を扱いながら、Hotchnerにおいてはフィッツジェラルドの醜悪さが目立ち、Mayfieldにおいてはヘミングウェイの醜悪さが際立つと対照的であるのは、それぞれの背後にいる当事者たちのバイアスの反映と考えると分かりやすいと思う。

“Ellerslie”訪問に関する資料としては、ヘミングウェイ自身が書き残したものとして、『移動祝祭日』の原稿(未刊行)の中にこの話を扱った4ページのタイプスクリプトがある。それによると、フィッツジェラルド夫妻とヘミングウェイ夫妻は、エール対プリンストンのフットボール試合を観戦した後、共に列車でフィラデルフィアまで行き、そこからフィッツジェラルドの車Buickで“Ellerslie”へ向かうが、列車内で酔っ払ったフィッツジェラルドが、乗客の医学生を淋病医者と呼んだ上、「医者よ、汝自身を治せ」<sup>18</sup>と宣告する等の迷惑行為をする。駅から“Ellerslie”

---

17 Ernest Hemingway: *Selected Letters, 1917-1961*, p. 290.

18 ルカ福音書4章23節にあるイエスの言葉。聖句をこのような文脈で使うのは、ユーモアと諧謔精神旺盛なフィッツジェラルドがいかにもやりそうなことで、このエピソードが実際に起きただろうことを裏付けるディテールの一つである。

へ向かう車中では、お抱え運転手がヘミングウェイに対し、主人のフィッツジェラルドがオイル交換をさせてくれないと嘆く。<sup>19</sup> “Ellerslie”に近づくと、どの道に入るかで、フィッツジェラルド夫妻はいさかいを始め、車が自宅に着いた頃には、夫妻は二人ともうたた寝をしていた。翌朝、スコティーを車で教会へ送る運転手が、車を修理に出しに行くとヘミングウェイに告げるところでこの資料は終わっていて、“Ellerslie”におけるディナーの様子は記されていない。<sup>20</sup>

ヘミングウェイの“Ellerslie”訪問にまつわる事実関係を確定する上で、他に重要な文書は、ヘミングウェイが訪問後にフィッツジェラルド夫妻宛てに出した礼状と、父親を失ったヘミングウェイに対し、フィッツジェラルドが出した悔み状である。ヘミングウェイは、礼状の中では、フィッツジェラルドの酔態や醜行については一切触れず、むしろ、‘We had a wonderful time—you were both grand’ とか ‘we had a glad time’ と述べ、滞在中のトラブルとしては、予定の列車に間に合うよう急がせて、フィッツジェラルドに迷惑をかけたことを詫びているだけである。<sup>21</sup> この礼状に異様な所があるとするれば、“Ellerslie”滞在中のことには全く言及せず、帰る日の駅のプラットホームで起きた出来事につき詳しく語るほど具体的に語っていることである。フィッツジェラルドが警官に逮捕されたこともここに述べられている。

フィッツジェラルドの悔み状は、前述したように、ヘミングウェイが、旅行中に父親の訃報に際し、急遽、手持ち金が必要になった時、フィッツジェラルドが即時に100ドル送ってくれたことに謝意を表するため、葬儀後12月9日頃に出した礼状に対する返事で、弔意の他に様々な内容を含んでいるが、その中に、‘It was great to have you both here, even

19 ここだけは、Hotchnerの記述と一致するから、如何に信憑性に乏しくても、Hotchnerの記述の背後にヘミングウェイの語りがあることは間違いないだろう。

20 Bruccoli, *Fitzgerald and Hemingway*, p. 101 及び Donaldson, *Hemingway vs. Fitzgerald*, pp. 120-121.

21 Hemingway's letter to F. Scott and Zelda Fitzgerald, c. 18 November 1928. *Selected Letters*, p. 290.

when I was intermittently unconscious' という一文がある。<sup>22</sup> 明らかに、ヘミングウェイ夫妻の“Ellerslie”滞在のことであり、その時にホストであるフィッツジェラルドは、しばしば人事不省になったことを自ら認めているのである。この時にフィッツジェラルドが酔態をさらしたことは間違いが無い。しかし、その具体的内容については、Hotchner版とMayfield版との二つがあり、前述したように、そのいずれにも、背後にいる資料提供者のバイアスがかかっている、どちらか一方が正しいというような判断はとてできないのである。ここで、もう一人の証言者に登場してもらわなければならない。ヘミングウェイ夫妻が“Ellerslie”を訪れた日、実は、プリンストンでのフットボール試合の観戦からずっと夫妻に同行していた人物が一人いた。*This Side of Paradise*の中で生き生きと描かれているプリンストンのクラブ制度反対運動において、その指導者の一人であったBurn Holidayのモデルとなった学生であり、今は画家としてヘミングウェイと親しいMike Straterである。1984年に優れた伝記*Invented Lives: F. Scott and Zelda Fitzgerald*を出したJames R. Mellowは、1981年8月、Straterに直接インタビューし、“Ellerslie”滞在中について話すことを拒むStraterから、フィッツジェラルドとヘミングウェイには二度と会いたくないと宿泊した翌朝に思ったこととか、「あの二人は本当にひどいもんだ。互いに最低のものを引き出しあっていた」という証言を得ている。<sup>23</sup> また、1992年に『ヘミングウェイ伝』第3巻目に当たる*Hemingway: The American Homecoming*を刊行したレノルズも、Straterの証言を使って同じ問題に迫っている。彼が挙げるのは、“Ellerslie”滞在中の三日後、Straterがヘミングウェイ宛てに出した手紙である。その中でStraterは、「あの時の事に比べれば、闘牛の方がまだ静かなもんだ。…フィッツジェラルドは、しらふならすぐくいい奴なんだが」と言って、<sup>24</sup> “Ellerslie”滞在中に、二度と経験したくないような目に

---

22 Fitzgerald's letter to Hemingway, 28 December 1928. *A Life in Letters*, p. 160.

23 James R. Mellow, *Invented Lives*, p. 328, 532.

会ったことを示唆している。ヘミングウェイの“Ellerslie”滞在時に何が起きたのかということに関し、Straterの証言は、ヘミングウェイの礼状やフィッツジェラルドの返信から窺えるものとは大きな隔たりがあると言わなければならない。このことは、フィッツジェラルドとヘミングウェイとの交友関係上の事柄の真实性を知る上で、当事者である作家達の手紙が常に決定的であるとは限らないことを示している。当事者同士がストレートに語りたくないような微妙な事柄がある。ヘミングウェイの“Ellerslie”訪問は、正にそのケースであった。とすれば、フィッツジェラルドとヘミングウェイとの交友関係の伝記的事実を確定する上で、作家同士が互いに交わした書簡や電文の解読が必須の基本的方法であるにしても、確定しようとする事実の内容によっては、当事者の書簡が、かえって事実の正しい理解を妨げたり、歪めたりすることも有り得ることを銘記しなければならない。ヘミングウェイの“Ellerslie”訪問の実態をヘミングウェイとフィッツジェラルドの書簡によって把握しようとする時に、我々が学ぶことは、正にそのことである。

1925年4月にパリの酒場ディングゴで初めて会って以来、ヘミングウェイは、その時のフィッツジェラルドの異様な酔態や、その数日後、フィッツジェラルドの車を取りに行くため、リヨンからパリまで一緒にドライブした時の異常な体験にも拘わらず、フィッツジェラルドを先輩作家として、また、「あなたこそ、自分が言いたいことは何でも話せる世界中で唯一の人だ」と書くほどに、<sup>25</sup> 掛け替えの無い友人として遇してきたが、その関係は同時に、フィッツジェラルドに対する幻滅感と侮蔑の念を次第に募らせていく過程でもあった。二人の関係に生じた亀裂が既に広がりつつあった1928年当時、ヘミングウェイの“Ellerslie”訪問が、関係の是正に寄与したのか、それとも一層の悪化を招いたのかは、作家同士の交わした書簡からは分からない。しかし、この3週間後にフロリ

---

24 Michael Reynolds, *Hemingway: The American Homecoming*, p. 204, 256.

25 Hemingway's letter to Fitzgerald, c. 24 November 1926. *Selected Letters*, p. 231.

ダに向かう車内で父親の訃報を受けたヘミングウェイが、パーキンズ、フィッツジェラルド、Straterの三人に送金依頼の電報を打ったおり、即座に金を送って、ヘミングウェイの急場を救ってくれたのは、フィッツジェラルドただ一人であった。<sup>26</sup> その時、ヘミングウェイがフィッツジェラルドに対してどれほど有り難く思ったかは、彼の出した礼状の中によく表れている。「親愛なるスコット：君は何ていい奴なんだ。しかも、僕に金を渡すためのその手際によさといったら。…今回の君の素晴らしさにもう一度心から感謝する。大好きな父が死んだ直後なので、実を言えば、とてもじゃないが手紙を書くような気分ではない。しかし、どうしても君には感謝の気持ちを表わしたかったのだ。」<sup>27</sup>

1928年の終わりに、フィッツジェラルドがヘミングウェイの急場を救ったことにより、一時好転したかに見えた二人の関係は、翌29年になると、いくつかの出来事を契機に不和が再燃し、決定的に悪化することになる。“Ellerslie”の賃貸契約が終了する3月、フィッツジェラルド夫妻は4度目のそして最後になる渡欧をし、ジェノヴァからリヴィエラを経てパリに向かうが、4月5日にフランスに渡航するヘミングウェイは、フィッツジェラルドが自分と同時期にパリに行くことを知って、渡航前の準備であわただしい中、パーキンズに手紙を書いて、自分のパリの住所をフィッツジェラルドに教えないように頼んだ。「前に一緒にパリにいた時、泥酔したスコットは私の家主に悪態をついたり、玄関先で立小便をしたり、未明にアパートのドアを壊そうとしたりしたため、我々夫婦はアパートを追い出されてしまったことがあるので、苦勞して

---

26 この時なぜパーキンズが動かなかったのかは、意外な謎と思われるかもしれない。ヘミングウェイ・パーキンズ書簡集によると、ヘミングウェイは1928年12月6日午後5時19分にパーキンズ宛てに「父死す／北フィラデルフィア駅に即刻100ドル送金されたし」という電報を打ち、それから数時間も経過しない8時32分に「スコットが送ってくれた／前の電報は放念されたし」という第2報を送っている。こうした資料から、パーキンズが送金しなかった理由も分かり、又、フィッツジェラルドがヘミングウェイのためにこの時如何に迅速に行動したかということも分かるのである。Cf. *The Only Thing That Counts*, p. 83.

27 Hemingway's letter to Fitzgerald, c. 9 December 1928. *Selected Letters*, p. 291.

やっと見つけた閑静で快適な今度のアパートを彼のせいでまた追い出される羽目になるのだけはご免である」という理由によるものである。<sup>28</sup>ヘミングウェイは同じ手紙の中で、「スコットのことはとても好きだ」とも述べ、また、住所を教ええないといっても「友情とは何の関係も無い」と言っている。<sup>29</sup>しかし、再びパリでヘミングウェイと語り合えることを楽しみにしていたフィッツジェラルドは傷ついた。<sup>30</sup>こうしたいきさつは、この後、ヘミングウェイが又借りしているアパートの家主に、フィッツジェラルドがヘミングウェイに口止めされたことを告げ口したのかどうかをめぐって、二人の間に摩擦が生じるが、その遠因にもなったのではないだろうか。フィッツジェラルドの告げ口をめぐる問題については、8月23日付けのヘミングウェイ宛ての手紙の中でフィッツジェラルドが弁明をし、<sup>31</sup> それに対してヘミングウェイは、9月4日付けの返事の中で反論し、<sup>32</sup> 更にフィッツジェラルドが、9月9日付の返書で、ヘミングウェイとは異なる認識を示すという経過を辿る。<sup>33</sup> どちらの言い分が正しいのかを我々が知ることは困難であるが、このように比較的解消が容易に思われる事柄すら、すぐに解決できずに尾を引くほど、両者の関係が容易ならざる事態になっていたということが伝わって来るのである。

丁度この時期に両者の軋轢を生じさせた別の契機は、*A Farewell to Arms*（『武器よさらば』）の原稿（タイプスクリプト）を読んだフィッツジェラルドがヘミングウェイに詳細な意見書を送りつけたことである。2

28 但し、レノルズは、これは「ヘミングウェイ特有の誇張であり、ヘミングウェイ夫妻がアパートを追い出されたという事実はない」と述べている。Reynolds, *Hemingway: The 1930s*, p. 318.

29 Hemingway's letter to Perkins, 3 April 1929. *The Only Thing That Counts*, p. 97.

30 Brucoli は、この時のフィッツジェラルドの心の痛手を作家の *Notebooks* の中にある「Snubs(拒絶)」という見出しの下の 'Ernest apartment' という書き込みと関連させている。Fitzgerald and Hemingway, p. 107.

31 Brucoli, *Fitzgerald and Hemingway*, p. 129.

32 *Selected Letters*, p. 304.

33 *A Life in Letters*, pp. 168-169.

作目の novel を書き上げた1929年のヘミングウェイは、3年前の1926年4月に、リヴィエラにいるフィッツジェラルド宛てに、「8月にはアンテイーブに行きますが、まだ誰にも見せていない『日はまた昇る』の原稿を持参しますので、どんなことでもアドバイスをお願いします」<sup>34</sup> と書いた新進作家の謙虚さは持ち得なかった。ヘミングウェイは『武器よさらば』のタイプスクリプトをフィッツジェラルドに見せたがらず、結局、*Scribner's Magazine* 5月号でこの作品の連載が始まった後の1929年6月になって初めて、フィッツジェラルドは原稿を見ることができた。その後でフィッツジェラルドがヘミングウェイに送りつけた9ページにわたる批評・教示・忠告 (*A Life in Letters*, pp. 164-167) は『日はまた昇る』の場合より手厳しいものであった。「このようなことをすれば我々は友人でいられなくなるかもしれない」ことは、フィッツジェラルド自身意識していたが、しかしそれにも拘わらず、「君のことと君の将来のことなどは全く考えようともしない書評家等に比べれば、私が批評する方がずっと意味があるのだ」と書き添えている。<sup>35</sup> たとえ大切な友を失う恐れがあるとしても、文学に関わることでは譲れないという作家魂の表出なのか。それとも、友情を破綻させるかもしれない危険を冒しても敢えて通さなければならぬ真の友情なのか。いずれにしろ、ヘミングウェイは結果的に、この時のフィッツジェラルドのアドバイスの一部を受け入れ、『武器よさらば』40章の冒頭 ‘We had a fine life’ の後に続く、主人公 Frederic Henry の非常に長い思索的な語りを削除した。<sup>36</sup> また、フィッツジェラルドは、この小説の最後に Catherine が死ぬ時、戦争の存在があまりに希薄であることを批判する。<sup>37</sup> ヘミングウェイは、フィッツジェラルドのアドバイスを一部受け入れたものの、批判されたことに対しては、決して快く思わなかった。これ以降、フィッツジェラルドの批判

---

34 Hemingway's letter to Fitzgerald, c. 20 April 1926. *Selected Letters*, p. 200.

35 *A Life in Letters*, p. 165.

36 Brucoli, *Fitzgerald and Hemingway*, pp. 115-118.

37 *A Life in Letters*, p. 165.

を仰ぐこともアドバイスを受け入れることもなくなるのである。それどころか、ヘミングウェイは後年、『武器よさらば』に対するフィッツジェラルドのアドバイスを拒否したと主張し始めるようになる。1934年暮に出したパーキンス宛ての手紙の中で、ヘミングウェイは、「彼(フィッツジェラルド)は、その他数多くのアドバイスをしてくれたが、私は何一つ受け入れなかった」と述べている。<sup>38</sup>

1929年にフィッツジェラルドとヘミングウェイとの間に軋轢を生じさせたもう一つの契機が、ヘミングウェイとMorley Callaghanとのボクシング試合において、フィッツジェラルドの犯した計時ミスである。ヘミングウェイの死後にキャラハンが著した*That Summer in Paris* (1963)によると、パリのアメリカンクラブで行なわれたヘミングウェイとキャラハンとのボクシングの練習試合でフィッツジェラルドが計時係りを務めたが、第2ラウンドで、キャラハンのパンチを口に受けたヘミングウェイが、唇を切って出血し、そこに続け様にジャブを受け、更に見事なアッパーカットを入れられてダウンを喫し、仰向けに倒れた。ヘミングウェイを強い男のモデルとして崇拝していたフィッツジェラルドは、ヘミングウェイが出血した上、打たれ放題であることに驚いて、3分で終わるべきこのラウンドの終了の告知を4分経過するまで忘れてしまった。それを知らされたヘミングウェイは怒りのあまり、マットから立ち上がりざま、フィッツジェラルドに対し、「俺が倒されるのを見たくてわざとやったのだろう」と毒づいたのである。フィッツジェラルドは、再開された練習試合で更にはまを重ねた。キャラハンがマットのへりに躓いて片膝をついた時に、ヘミングウェイのご機嫌取りをするためか、「アーネストにダウン1回、モーリーにダウン1回」と愚かにも叫んだのである。これでは、誇り高きヘミングウェイの怒りは収まるどころか、火に油を注ぐようなものではないかという感想をキャラハンは述べている。<sup>39</sup> このボクシングについての当事者の証言として、一番早いものと

38 Hemingway's letter to Perkins, December 28, 1934. *The Only Thing That Counts*, p. 219.

39 Morley Callaghan, *That Summer in Paris*, pp. 212-216.

しては、ヘミングウェイが8月28日に旅先のスペインからパーキンズに宛てた書簡がある。*That Summer in Paris*における記述と共通する事は、ヘミングウェイがキャラハンに打たれて唇を切ったことや、観戦に夢中の計時係が時間を忘れて1ラウンドを長くしてしまったことである。但し、この手紙によると、長くされたラウンドは4分ではなく、3分45秒である。また、ヘミングウェイは試合の前にワインとウイスキーを飲んでいて、相手のキャラハンがよく見えないほど酔っており、息が続かないことを考慮して、1ラウンド1分で2分休憩という変則的な試合時間にした。つまり、*That Summer in Paris*において1分余計に長かったラウンドは、ヘミングウェイの手紙では、2分45秒も長かったことになる。この手紙の中でヘミングウェイは、一度はダウンしたことも認めているが、それはスリップしたからだと言う。<sup>40</sup> つまり、キャラハンの記述によれば、彼がヘミングウェイを打ちのめしたことになるが、ヘミングウェイによれば、自分は負けていないということになる。ヘミングウェイの手紙では、彼に不利な状況を殊更に言い立てる傾向がある。最初のフィッツジェラルド伝を執筆中のArthur Mizenerの問い合わせに対して、ヘミングウェイが1951年1月4日に出した返信の中で、この計時ミス事件については、1ラウンド2分で1分休憩と取り決めた試合で、フィッツジェラルドは第1ラウンドを13分にしてしまったと述べていることも、<sup>41</sup> このボクシング試合について語る時に、自分に不利な条件を誇張するというヘミングウェイの証言の特徴に合致していると言える。

ところで、この計時ミス事件は、起きた当初に、フィッツジェラルドとヘミングウェイとの関係を険悪にしたことは確かであろうが、事件後の7月から10月にかけて二人が交わした計10通（ヘミングウェイからフィッツジェラルドへ6通、フィッツジェラルドからヘミングウェイへ4通）の現存の往復書簡から読み取る限りでは、この事件が深刻な後遺症

---

40 *Selected Letters*, p. 302. *The Only Thing That Counts*, p. 116.

41 *Selected Letters*, pp. 716-7.

を残したとは到底思えない。事件後最も早く書かれたことになるフィッツジェラルド宛書簡(7月)において、ヘミングウェイが問題にしている殆ど唯一の事柄は、『武器よさらば』2回目を連載した *Scribner's Magazine* 6月号が猥褻の廉でポストンで押収されたため、小説の刊行が危ぶまれるということであった。<sup>42</sup> また、それに対するフィッツジェラルドの返事は前記した8月23日付け書簡であるが、内容の中心は、告げ口疑惑への弁明を別にすれば、嘗てパーキンズが職を賭して、*This Side of Paradise* 刊行への道をつけてくれたことを引き合いに出しながら、ヘミングウェイの懸念を取り除くことであり、いずれの書簡にも、計時ミスへの言及は一切無いのである。その後の8通の書簡にも計時ミスへの言及は無く、それどころか、「あなたと会うのに一番都合のよい時はいつか。電話はあるのか。」<sup>43</sup>と問うヘミングウェイのフィッツジェラルド宛て短信やヘミングウェイに彼の所有するフォード車の購入経費について問い合わせるフィッツジェラルドの短信からは、<sup>44</sup> 二人の作家が1929年秋に共にパリにいた時、摩擦はありながらも、友人としての普通の付き合いがあったということをむしろ示している。

しかし、沈静したかに見えた計時ミスによる軋轢は、後に意想外の形で蒸し返されることになり、キャラハンの解釈によれば、フィッツジェラルドとヘミングウェイとの交友関係を修復不能にしてしまうほどの深刻な事態をもたらすことになるのである。ニューヨークを経てトロントに戻ったキャラハンは、11月24日の *the New York Herald Tribune* に載った Isabel Paterson の記事を読んで愕然とする。その記事によると、パリのカフェ *The Dome* にいたヘミングウェイは、キャラハンに対し、「お前のボクシング小説は全然駄目だ。ボクシングを知らないんだろう」と挑発し、二人はボクシング試合をすることになるが、第1ラウンドでヘミングウェイはキャラハンにノックアウトされてしまった。これは、

42 *Fitzgerald and Hemingway: A Dangerous Friendship*, pp. 128-129.

43 *Ibid.*, p. 138.

44 *Ibid.*, p. 139.

事実と全く異なる上、この記事を読んだ時のヘミングウェイの怒りを容易に想像できたキャラハンは、即座に the *Herald Tribune* の Paterson 宛てに手紙を書き、キャラハン自身による訂正記事をすぐに掲載するよう求めた。<sup>45</sup> しかし、訂正記事が出る前に、パリのフィッツジェラルドから、訂正を求めるしかも受信人払いの電報がキャラハンの所に送られてきた。The *Herald Tribune* の記事に対し、自分に責任があるように扱われたキャラハンは怒ってフィッツジェラルドに返信を出す、それに対する返事はヘミングウェイから来て、それによると、電報は、フィッツジェラルドが自らの意思に反しながらも、ヘミングウェイに強要されて送ったものだった。<sup>46</sup> しかし、ヘミングウェイがこの手紙の中で、電報を打った全責任は自分にあるとしきりに強調するのは、文句があるなら俺が相手になるという脅しであると読むことができる。<sup>47</sup> フィッツジェラルドからも謝罪の手紙が来た。フィッツジェラルドはこの手紙の中で、ボクシング試合の件については自分自身、ウィルソンやパーキンスのような親友に対してさえ一度も語ったことが無いと言う。<sup>48</sup> 実際この件については、フィッツジェラルドはずっと沈黙を守っていたが、それは自分の恥を自ら晒すことはないということだけではなく、ヘミングウェイのプライドへの配慮もあって、沈黙を守った筈である。キャラハンは、ヘミングウェイに強要されて自分に電報を出した時のフィッツジェラルドの思いを想像してみる。ボクシング試合の計時ミスについて、ヘミングウェイに故意にやったと言われた時に、フィッツジェラルドのプライ

---

45 *That Summer in Paris*, pp. 241-242. *Herald Tribune* の日付は、*Fitzgerald and Hemingway*, p. 142 による。

46 *Ibid.*, pp. 244-245.

47 ヘミングウェイがキャラハンに対して激しい怒りを燃やしたのは、the *Herald Tribune* の記事のせいだけではない。丁度この時期に、ヘミングウェイを訪れたフィッツジェラルドが、McAlmon からヘミングウェイは同性愛者であると聞いたキャラハンが、フィッツジェラルドにそれは本当かどうか尋ねて来たこととヘミングウェイに話したことも、the *Herald Tribune* の記事に加え、ヘミングウェイのキャラハンに対する怒りをいや増す結果になった。Cf. Hemingway's letter to Perkins, 10 December 1929. *The Only Thing That Counts*, pp. 132-133.

48 *That Summer in Paris*, pp. 246-247.

ドは傷つけられた。The *Herald Tribune*の記事にしても、自分の計時ミスが一つの原因になったと考えて、責任を感じ、ヘミングウェイの強要に屈したのではないのか。とすれば、フィッツジェラルドのプライドは、この時またもう一度深く傷つけられたことになる。「痛ましきスコット (Poor Scott)」。<sup>49</sup> キャラハンも更に想像する。これを契機に、フィッツジェラルドとヘミングウェイの交友が元通りになることはもはや無いであろう。確かにキャラハンの想像通りであったかも知れない。それを裏付ける資料は、キャラハン自身は知らなかっただろうが、ヘミングウェイがフィッツジェラルドに宛てた12月12日付の手紙である。この中でヘミングウェイは、フィッツジェラルドの計時ミスが起きた時に、それを特に問題にはしなかったということを繰り返し強調した後で、「私が本当に怒ったのは、キャラハンの嘘だらけの自慢話を伝える例の記事を読んだ時であった。その時、怒りのあまり、この自慢話をもたらずきっかけとなった君のミスについてもつい怒ってしまったのだ」と述べている。そして、キャラハンに電報を打つようにフィッツジェラルドに強要したことも示唆している (I would never have asked you such a thing)。<sup>50</sup> ヘミングウェイはこの手紙全体において、フィッツジェラルドに対して非常に気を使った書き方をしており、また、詫びの言葉を繰り返し、フィッツジェラルドの名誉心 (sense of honor) に何度か言及する。これらは、ヘミングウェイがキャラハンへの電報を強要したことで、フィッツジェラルドの名誉心を傷つけてしまったことに対する配慮にほかならないと読むことができるのではないだろうか。

前述したように、フィッツジェラルドは、ヘミングウェイと会った回数記録を残したが、その記録の最後に、「1929年から1940年までの11年間に4回。26年以来本当の友達ではない」と記していることから、<sup>51</sup> 1929年という年が、『日はまた昇る』の原稿にフィッツジェラルド

49 *Ibid.*, p. 247.

50 *Selected Letters*, p. 313.

51 *Fitzgerald and Hemingway*, p. 206.

が忠告したことを契機に二人の作家の関係に軋轢が生じた1926年と共に、フィッツジェラルドにとっては、ヘミングウェイとの交友関係において大きな屈折点であったと意識されていたことが分かる。1930年代にフィッツジェラルドがヘミングウェイと会った回数は、確証できるものとしては、1931年10月における会合、<sup>52</sup> フィッツジェラルドの泥酔と醜行で記憶される1933年1月のニューヨークにおける会食、<sup>53</sup> 1937年6月4日にニューヨークのカーネギー・ホールで催されたアメリカ作家会議においてヘミングウェイがファシズム弾劾演説を行なった時、<sup>54</sup> そして、MGMと契約したフィッツジェラルドが7月にハリウッドに移って間もなく、ヘミングウェイがスペインの共和派支援の義金を募るため同じ月の12日にハリウッドで*The Spanish Earth*というドキュメンタリー映画を上映した時との4回である。<sup>55</sup> 従って、この計算では1929年に彼はヘミングウェイとただの一度も会わなかったことになる。無論、そうではない。とすれば、殆ど会わなくなるほど二人の関係が悪くなっていたことを表わすのに、フィッツジェラルドが“Four times in eleven years (1929-1940)”と書いて、関係破綻の開始期を1930年ではなく、1929年にしたことの意味を考えてみるべきであろう。フィッツジェラルドが、1940年の時点でヘミングウェイとの交友関係を振り返った時、1929年に生じた一連の出来事を、二人の関係が30年代に入って決定的に悪化し破綻に至るその原因であるばかりでなく、破綻の予兆として意識していたと考えることができるのではないか。1929年は、フィッツジェ

52 証拠はフィッツジェラルドが残した記録にあるのみ。最も精緻なヘミングウェイの伝記であるレノルズの*Hemingway: The 1930s*においても、この会合に関する言及は一切無い。

53 この会食については同席したウィルソンによる記録がある。cf. Edmund Wilson, *The Thirties*, pp. 301-303.

54 この時、ヘミングウェイに会うためNorth Carolinaから出て来たフィッツジェラルドが、翌5日、帰途ワシントンからヘミングウェイ宛てに送った書簡がある。cf. *A Life in Letters*, p. 324.

55 この時は、翌13日フィッツジェラルドがヘミングウェイ宛てに電報を打っている。cf. *A Life in Letters*, p. 332.

ラルドにとって、最大の親友ヘミングウェイとの関係が取り返しのつかない形で破綻していくその開始期として重い意味を持った年なのである。

上記したように、1931年からフィッツジェラルドが急死する1940年までの10年間でヘミングウェイとフィッツジェラルドはわずか4度しか会わないほど、冷え冷えとした関係になっていった。1931年4月12日にヘミングウェイがフィッツジェラルドに手紙を出して以降、両者が直接手紙をやり取りすることも途絶え、パーキンズを仲立ちにして、互いの消息を知るような関係になっていた。1934年5月10日、フィッツジェラルドは実に3年ぶりにヘミングウェイ宛てに、同年4月12日に刊行された *Tender Is the Night* の感想を求める手紙を出している。<sup>56</sup> これに対するヘミングウェイの返事は辛辣で、しかも、作中人物のモデルに矛盾するようなフィクション化を行なってはならないという奇妙な論理を展開している。<sup>57</sup> フィッツジェラルドは、ヘミングウェイに反論を書いた。ヘミングウェイによる *Tender* 批判は、一言で言えば、composite characterization（現実のモデルにフィクション的要素を加えること）が方法的に誤りであるということになるが、これに対するFitzgeraldの反論は公正且つ真摯であり、また実に鋭利である。<sup>58</sup>

*Tender Is the Night* の不評で経済的にも、また作家としてもますます追い詰められていくフィッツジェラルドは、1934年以降、発表の場を主として *Esquire* に移し、“The Crack-Up”シリーズもこの雑誌に発表されるが、1936年8月号（発売は7月）に、フィッツジェラルドの“Afternoon of an Author”と同時掲載されたヘミングウェイの“The Snows of Kilimanjaro”の中に、‘poor Scott Fitzgerald’ とフィッツジェラルドを名指して誹謗する表現があったことから二人の関係は俄かに緊張の度を高め、二人の交友史の中で最大にして最後の軋轢が生じた。当

56 *A Life in Letters*, p. 259.

57 Hemingway's letter to Fitzgerald, 28 May 1934. *Selected Letters*, pp. 407-409.

58 *A Life in Letters*, pp. 262-264.

時アッシュヴィルにいたフィッツジェラルドは、7月16日、ヘミングウェイに手紙を書き、「*de profundis*（“The Crack-Up”シリーズを指す）を書いたからといって、自分は死者として弔ってもらいたいと思ったわけではない。…この作品（『キリマンジャロの雪』）を短編集に入れる時には自分の名前を削除してほしい」と要請した。<sup>59</sup> フィッツジェラルドの抗議文に対するヘミングウェイの返事は失われたが、その内容は間接的に知ることができる。資料としては、ヘミングウェイがパーキンズに宛てた1936年7月23日付の手紙、<sup>60</sup> ヘミングウェイの返事を読んだ *Esquire* の編集長 Arnold Gingrich が30年後に書いた記事等であるが、<sup>61</sup> 一番注目すべきは、フィッツジェラルドが Beatrice Dance に書いた9月15日付けの手紙である。この手紙の中でフィッツジェラルドは、自分の名前の削除にヘミングウェイは同意しながらも怒った様子で、「私が “The Crack-Up” 等で恥ずべきプライバシーを自ら告白したので、もはや私には書かれて困るようなプライバシーはないと思った」と言ってきたことを記し、更に、ヘミングウェイの性格の本質について驚くほど洞察的な理解を示している。「彼も私同様に神経がやられている。しかし、発症の仕方は異なるのである。彼の症状は誇大妄想的であり、私の場合は憂鬱症的なのである。」<sup>62</sup> フィッツジェラルドは、この手紙を出した4日後にパーキンズにも、ヘミングウェイが名前の削除に同意したという趣旨の手紙を書いている。<sup>63</sup> これに対する返事をパーキンズは9月23日付けで出しているが、その中で、「アーネストのしたことについては私も怒っている。刊行本にする時には、私が彼と話をつける」と言って、名前の削除についてフィッツジェラルドに確約し、更に、この時初めて、『キリ

---

59 *Ibid.*, p. 302.

60 *The Only Thing That Counts*, pp. 245-246.

61 Arnold Gingrich, “Scott, Ernest and Whoever,” *Esquire*, 66 (December 1966), pp. 186-189, 322-325.

62 Andrew Turnbull, ed., *The Letters of F. Scott Fitzgerald*, pp. 541-543. Donaldson は、フィッツジェラルドのヘミングウェイ観に対し、ヘミングウェイの憂鬱症も指摘する。*Hemingway vs. Fitzgerald*, p. 199.

63 Fitzgerald’s letter to Perkins, 19 September 1936. *Dear Scott/Dear Max*, pp. 230-231.

マンジャロの雪』における 'the very rich are different' という台詞について、ヘミングウェイの言及の仕方に嘘と作意のあることを示唆している。<sup>64</sup> しかし、『キリマンジャロの雪』における poor Scott Fitzgerald を現在の poor Julian に変えるには一筋縄ではいかなかった。

ヘミングウェイがスペイン市民戦争を取材するため1937年3月にスペインに赴いた後、フィッツジェラルドはパーキンズに手紙を出し、「アーネストはスペインについて傑作を書くに違いない」と述べ、次に、ヘミングウェイが自分への返事で『キリマンジャロの雪』における自分の名前の削除に同意したことを再び持ち出して、パーキンズに念を押すが、同時に、ヘミングウェイの返事は「悪感情に満ちたもので、彼が私に対し、まだ友人としての気持ちを持っているとはもはや思えない」と言っており、ヘミングウェイに対する不信感を吐露している。<sup>65</sup> それに対する3月19日付の返信で、パーキンズは、ヘミングウェイはフィッツジェラルドのことを今でも友人と思っており、約束は必ず守るからと述べてフィッツジェラルドを安心させようとする。<sup>66</sup> しかし、フィッツジェラルドの不安は杞憂ではなかった。Houghton Mifflin社から1937年にEdward O'Brien編 *The Best Short Stories of 1937* が出版された時、『キリマンジャロの雪』も選ばれたが、poor Scott Fitzgerald という語句はそのままであった。1938年の秋にスクリブナー社がヘミングウェイ短編集を出すことを知ったらしいフィッツジェラルドは、その年の3月4日にパーキンズに手紙を出し、O'Brienの短編集の件はヘミングウェイもやむを得なかったのだらうと寛大に構えながらも、「しかし、この秋にスクリブナーから出る時は、彼が削除を私に約束したことを忘れないでほしい」と、再度念を押した。<sup>67</sup> 5日後の9日にパーキンズはフィッツジェラルドに返事を出し、「この件に関する私の考えはあなたもご存知でし

64 *Dear Scott/Dear Max*, p. 232.

65 *Fitzgerald and Hemingway*, p. 196. この手紙は *Dear Scott/Dear Max* には収録されていないが、この書簡集の巻末注に、この手紙への言及と部分引用(pp. 277-278)がある。

66 *Dear Scott/Dear Max*, pp. 236-237.

67 *Ibid.*, pp. 241-242.

よう。心配ご無用」と簡潔に答えている。<sup>68</sup> 1938年の夏、パーキンズは、ヘミングウェイの*The Fifth Column and the First Forty-Nine Stories*刊行準備の仕事をしてしたが、フィッツジェラルドの名前を『キリマンジャロの雪』から削除する件で、ヘミングウェイが問題の poor Scott Fitzgerald を単に poor Scott と変えたただけだったので、8月23日付のヘミングウェイ宛て書簡で、丁寧な言葉で情理を尽くしながらも、フィッツジェラルドの名前をそっくり削除するよう繰り返し要求し、「しかし、この件ではあなたがニューヨークに来た時に話し合ひましょう」と述べる。<sup>69</sup> Carlos Baker の *Ernest Hemingway: A Life Story* によると、ヘミングウェイは、8月30日にニューヨークの the Hotel Barclay でパーキンズと朝食を共にし、翌日、フランスに向かう船に乗っているが、<sup>70</sup> この朝食の席で、poor Scott を poor Julian に変えるという最終的な修正が決まったと考えられる。なぜならば、パーキンズは9月1日付のフィッツジェラルド宛て書簡で、「おとといヘミングウェイがまるで弾丸のようにここ（ニューヨーク）を通ってフランスに向かった」と述べ、更に、間もなく刊行されるヘミングウェイの新しい本に触れ、「その中の短編の一つは『キリマンジャロの雪』であるが、あなたの名前は入っていない」<sup>71</sup> と言っているからである。ヘミングウェイは、フィッツジェラルドに名前の削除を約束はしたものの、自ら積極的に果たそうという意志は無かった。それをヘミングウェイに実行させたのはパーキンズの粘り強い説得である。この時期、スクリブナー社にとって、ヘミングウェイは最大の人気作家であるのに対し、フィッツジェラルドは会社に莫大な借金があるだけで既に過去の作家と見なされていたことを考えれば、この件で示されたフィッツジェラルドに対するパーキンズの友情の篤さは並みのものでないことが自ずと知れるのである。前述したように、フィッツジェ

---

68 *Ibid.*, p. 242.

69 *The Only Thing That Counts*, pp. 268-269.

70 P. 334.

71 *Dear Scott/Dear Max*, p. 248.

ラルドとヘミングウェイが仲違いして、互いに手紙のやり取りをしなくなり、まして二人が直に会うことなど無くなった後は、パーキンズが仲立ちとなって二人の消息をそれぞれに知らせる役割を担った。パーキンズが存在なくしてフィッツジェラルドとヘミングウェイとの交友関係は続かなかったとさえ言えるのである。

フィッツジェラルドの“The Crack-Up”シリーズは、『キリマンジャロの雪』の中で poor Scott Fitzgerald という名前が使われることを誘発したが（少なくともヘミングウェイはそう弁明している）、フィッツジェラルドにとってもう一つの災厄を招くことになった。このシリーズを読んで、フィッツジェラルドに対する興味を抱いた Michel Mok によるフィッツジェラルド 40 歳を記念するインタビュー記事（1936 年 9 月 24 日）が、“The Other Side of Paradise, Scott Fitzgerald, 40, Engulfed in Despair” という見出しで、the *New York Post* に掲載され、更に、圧倒的な部数を誇る *Time* に転載されたことである。自分の零落ぶりを如実に語る記事を読んで衝撃を受けたフィッツジェラルドは、この時モルヒネによる服毒自殺を計った。この自殺未遂について我々が知っているのは、フィッツジェラルドが彼のエージェントである Harold Over 宛てに出した 1936 年 10 月 2 日付け書簡によるが、この書簡は全体として、自ら大失態を演じてしまったことに対する弁明じみたところがあり、「記事が出た時、もう終わりだと思い、モルヒネの壺を掴んで、馬一匹殺すにも十分な量を一息に飲んだ」等と、表現がいかにも大仰であり、この後、「付き添い看護婦が入って来て、空の壺を発見した」<sup>72</sup> ことになるにしても、私はこれは狂言自殺、と言うよりも、フィッツジェラルドの創作ではないかという疑念を拭いきれないのである。

パーキンズは 1936 年 10 月 1 日付けのヘミングウェイ宛書簡の中で、Mok の記事による屈辱を晴らす唯一の方法は優れた大作を書くこと意外に無いとフィッツジェラルドに言ったと記す。<sup>73</sup> そして、Harold Over

72 *As Ever, Scott Fitz-*, p. 282.

73 *The Only Thing That Counts*, p. 247.

も9月25日付けのフィッツジェラルド宛て書簡の中で、パーキンズと本質的に同じことを言っているのが興味深い。「ニューヨーク・ポストのあの記事は、あまり気かけないように。私には分かっていますよ。あなたが今までに書いたものより、もっと素晴らしい作品をこれから書いていくことを。」<sup>74</sup>・

フィッツジェラルドは無論このことを深く自覚していた。彼はこの後、借金返済のため、1937年7月よりハリウッドでMGMの脚本書きとなるが、結局はそこで、彼の作家人生で最大の作品 *The Last Tycoon* を書き始めるのである。その時、彼の心の中に常にあったものはヘミングウェイに対するライバル意識であった。ハリウッドにおけるフィッツジェラルドの愛人であった Sheilah Graham の言によれば、彼が心臓発作で急死する日の昼時、ヨーロッパの戦況を新聞で読んでいたフィッツジェラルドは、*The Last Tycoon* が成功したら、「ヨーロッパに行って、戦争について書きたい。アーネストだけにこのテーマを独り占めはさせないぞ」と言ったという。<sup>75</sup> フィッツジェラルドは自分の最大のライバルに最後の最後まで対抗心を燃やしていたのである。1940年10月に刊行された *For Whom the Bell Tolls* に対するフィッツジェラルドの評価が、献本してくれたヘミングウェイへの礼状における誉め言葉とは裏腹に、<sup>76</sup> ゼルダに宛てた手紙において（「この作品は『武器よさらば』ほどよくない。…しかし、平均的な読者には、彼が書いたどの作品よりも喜ばれるだろう」）、<sup>77</sup> 或いは、覚え書きにおいて“it is a thoroughly superficial book”<sup>78</sup> と非常に厳しいのも、敗者による勝者への妬みと取るべきではないだろう。*The Last Tycoon* 執筆中のフィッツジェラルドは、「自分の書く作品のほうがヘミングウェイのものより時代に先んじており、それ故に、たとえ小さいながらも不滅性 (some small immortality) を持つの

---

74 *As Ever*, Scott Fitz-, p. 281.

75 *Beloved Infidel*, p. 329.

76 *A Life in Letters*, pp. 469-470.

77 *Dear Scott, Dearest Zelda: The Love Letters of F. Scott and Zelda Fitzgerald*, p. 374.

78 *The Notebooks of F. Scott Fitzgerald*, p. 335, (#2066).

だ」という強烈な自負心を抱いていたのである。「もし、健康さえ続けば。」<sup>79</sup>しかし、フィッツジェラルドの健康は続かなかった。

---

79 *The Notebooks of F. Scott Fitzgerald*, pp. 335-336, (#2068).

## Bibliography

### Primary Sources

- Baker, Carlos, ed. *Ernest Hemingway: Selected Letters, 1917-1961*. New York: Charles Scribner's Sons, 1981.
- Bruccoli, Matthew J., and Jackson R. Bryer, eds. *F. Scott Fitzgerald In His Own Time: A Miscellany*. New York: Popular Library, 1971.
- Bruccoli, Matthew J., ed. *As Ever, Scott Fitz-: Letters between F. Scott Fitzgerald and His Literary Agent Harold Ober 1919-1940*. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1972.
- Bruccoli, Matthew J., ed. *The Notebooks of F. Scott Fitzgerald*. New York & London: Harcourt Brace Jovanovich/Bruccoli Clark, 1978.
- Bruccoli, Matthew J., and Margaret M. Duggan, eds. *Correspondence of F. Scott Fitzgerald*. New York: Random House, 1980.
- Bruccoli, Matthew J., ed. *F. Scott Fitzgerald: A Life in Letters*. New York: Scribner, 1994.
- Bruccoli, Matthew J., ed. *The Only Thing That Counts: The Ernest Hemingway/Maxwell Perkins Correspondence 1925-1947*. New York: Scribner, 1996.
- Bryer, Jackson R., and John Kuehl, eds. *Dear Scott/Dear Max: The Fitzgerald-Perkins Correspondence*. New York: Charles Scribner's Sons, 1971.
- Bryer, Jackson R., and Cathy W. Barks, eds. *Dear Scott, Dearest Zelda: The Love Letters of F. Scott and Zelda Fitzgerald*. New York: St. Martin's Press, 2002.
- Hemingway, Ernest. "The Art of the Short Story." *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Ed. Jackson J. Benson. Durham, N. C.: Duke University Press, 1990.
- Hemingway, Ernest. *A Moveable Feast*. New York: Charles Scribner's Sons, 1964
- Turnbull, Andrew, ed. *The Letters of F. Scott Fitzgerald*. New York: Charles Scribner's Sons, 1963.

### Secondary Sources

- Baker, Carlos, *Ernest Hemingway: A Life Story*. New York: Charles Scribner's Sons, 1969.
- Bruccoli, Matthew J. *Scott and Ernest: The Authority of Failure and the Authority of Success*. New York: Random House, 1978.
- Bruccoli, Matthew J. *Fitzgerald and Hemingway: A Dangerous Friendship*. New York: Carroll and Graf, 1994.
- Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. Second revised edition, Columbia: University of South Carolina Press, 2002.
- Callaghan, Morley. *That Summer in Paris: Memories of Tangled Friendships with Hemingway, Fitzgerald, and Some Others*. New York: Coward-McCann, 1963.
- Donaldson, Scott. *Hemingway vs. Fitzgerald: The Rise and Fall of A Literary*

- Friendship*. Woodstock, New York: Overlook Press, 1999.
- Graham, Sheila, and Gerold Frank. *Beloved Infidel*. New York : Holt, 1958.
- Hotchner, A. E. *Papa Hemingway: A Personal Memory*. London: Mayflower Books, 1968.
- Mayfield, Sara. *Exiles from Paradise: Zelda and Scott Fitzgerald*. New York: Delacorte Press, 1971.
- Mellow, James R. *Invented Lives: F. Scott and Zelda Fitzgerald*. Boston: Houghton Mifflin, 1984.
- Reynolds, Michael. *Hemingway: The American Homecoming*. Oxford: Basil Blackwell, 1992.
- Reynolds, Michael. *Hemingway: The 1930s*. New York & London: W. W. Norton, 1997.
- Wilson, Edmund. *The Thirties: From Notebooks and Diaries of the Period*. Ed. with an Introduction by Leon Edel. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980.

(英米文学科 教授)